

琉球大学学術リポジトリ

[論文] 泡瀬誌の一断片

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄地理学会 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田里, 友哲 メールアドレス: 所属: 琉球大学
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017643

泡瀬誌の一断片

田里友哲*

I はじめに

最近の沖縄では地域史(誌)づくりが、一種のブームのように普及している。それは市町村史(誌)に始まり、次第に微細な字史(誌)にまで及んでいる。いわゆる郷土の史・誌づくりのブームである。

こんど郷里である沖縄市字泡瀬の「泡瀬誌」の編集に参画する機会があって、その一端を分担執筆することになったが、実際に着手してみると、多くの難題にしばしば逢着し、戸惑いをさえ感ずるものがあった。

ことに字(ムラ)が、いつ発生し、継承されて今日に至ったかなど、その沿革を巡ると、史・資料の欠乏を痛感するものである。そして微細地域がまだまだ学問的に究明されていない部分も多いが、史料や統計資料などの欠如・欠略は言うに及ばず、断簡零墨だんかんれいぼくに至るまで戦禍により散逸、消滅、灰燼に帰すなど、戦後の沖縄における共通する苦悩の一端を垣間見るような気がしてならないのである。

本稿では泡瀬誌の一断片についてこれまであまり知られてない事象のいくつかを報告することにする。

II 無人島の頃の叙景

首里王府によって収録された『おもろさうし』¹⁾(1531年～1623年)には泡瀬という地名表記は見当らない。泡瀬という漢字表記の地名は、『球陽』²⁾巻20尚瀬王 2(1805)年の記事が初見で、それ以前、以後にはひらかな表記、カタカナ表記、異字表

* 琉球大学名誉教授

記など変化に富んでいる。

徳川幕府の命令で松平薩摩守が作成した『琉球国絵図』³⁾元禄15(1702)年には、中城湾内にひらかな表記の「あせ嶋」と「あふ嶋」の二つの島が明りょうに確認できる。その「あせ嶋」と「あふ嶋」はその位置関係からみて、現今の泡瀬と奥武であることは疑う余地がない。

あふ嶋は、オウ、オー島と発音され、「奥武嶋」と漢字表記されるので、その表記の面白味もあり、また奥武という呼称の地名が、沖縄の各地に多く分布することから、古くからそのことに注目した研究者も多く、外来神の渡御地説、古代の墓地説、聖なる場所説などの諸説⁴⁾がある。

あふ嶋に比べて「あせ嶋」は、先述の『琉球国絵図』(元禄図)以前の古地図や文献には事例が検索されず、この元禄図のひらかな表記の「あせ嶋」が、文献上の初出のもので、泡瀬の地名の起源と考えてよい。

ところでこの「あせ嶋」は、元禄図以前の古地図、文献などでは無名の無人島に過ぎなかったのである。それで『おもろさうし』には、直接に泡瀬を指し示す表記はないが、泡瀬に関わる文献の欠如を補足するため、無名の無人島であった頃の泡瀬島の叙景と思われる「おもろ」を引用することにする。

うらおそいおもろのふし (二ノ三十八)

一 ごゑく世のぬしの (越来の世の主が)

わしのみね ちよわちへ (鷲の嶺におわして)

いみやからど (今からぞ)
ごゑくは (越来は)
いみきや まさる (良神酒が 勝る)
又 あがる 世のぬしの (昇る世の主が)
こぢゃひら ちよわちへ(古謝坂におわして)

うらおそいふし (二ノ三十九)

一 ごゑく 世のぬしの (越来の世の主が)
わしのみね ちよわちへ(鷺の嶺におわして)
ひがのうみ みよれば(東の海を見ると)
しらなみやが (白波が)
なごり おそうやに(余波(となつて)寄せる様に)
又 あがる世の主の (昇る世の主が)

〔注釈〕 世のぬし 世の主。世の中を支配する者。地方の領主から王まで「よのぬし」<世の主>という。わしのみね 鷺の嶺。雑誌『南島』⁵⁾三輯に「越来城の東にある山、此処に海外貿易の倉庫があった」と注する。ちよわちへ 来給いて 居給いて。いみやからど 今からぞ。いみき 良い^{みき}神酒。こぢゃひら 古謝坂。あがる世のぬし 昇る世の主。「ごゑく世のぬし」の対語、ひがのうみ 東の海。しらなみや 白波。なごり 余波。おそうやに 襲うように。『南島』三輯及び『沖縄市史』第二卷⁶⁾では、校訂本の「しらなみや かなごりおそやに」を「しらなみやが なごり おそうやに」として解釈している。

『沖縄市史』第二卷の沖縄市関係おもろで、池宮正治氏は次のように解説する。

鷺の嶺は、対語の古謝坂^{ひら}を登りきった小高いところで、東の海^{ひが}の見えるところである。こういう小高い丘に登っての儀礼は、越来の世の主が、共同体の^{いやすか}弥栄と豊饒を約束する土地賛め・国見の儀礼である。

鷺の嶺から見下せる海といえは、現在の泡瀬一帯

の海岸であろうとして居られる。そして「しらなみやが なごり おそうやに」の解釈を「白い波がかぶさるように、次から次へと、岸に打ち寄せて来る、その無限軌道のような波の動きに、永遠を感じとったとも思われる」とし、いずれにしても断定はいま少しひかえたいとして居られる。

この点は今後に期待することにして、今「鷺の嶺」(現在ワシンムイと称し、崎原盛行・盛勇氏の案内で現地を確認)の小高い丘に登って眼下の中城湾を望むと、今は半島状に陸続きとなった泡瀬が、かつては無人島の泡瀬島であった頃の自然景観を想像するとき、寄せくる白波が、岸辺に打ち砕け、泡立ちとなって、さらさらと引き波となり、そのリズムを繰り返す。越来世の主は、この鷺の嶺に來られて丘の上から東の海^{ひが}の叙景を眺望され、領内の^{いやすか}弥栄と繁栄もかくありたいものだと感じられたであろう。

この白波の寄せくる東の海の岸辺こそ、無名の無人島、後の泡瀬島である。

凡そ18世紀の中葉まで中城湾内の北側に位置する「あせ嶋」と「あふ嶋」は無人島であった。湾内にはこの2つの島だけが存在するが、どうしてこの時期まで、この島々が開拓から見離されていたかということには素朴な疑問が湧いてくる。

それは中城湾の外洋側に位置する久高、津堅の島々が、古くから文献、古地図にその名が知られているからである。例えば、

^{しんしゅくしゅう}申叔舟著『海東諸国記』⁷⁾(1471年)に収録された「琉球国之図」(1453年)は、琉球最古の地図で文献学上も重要なものであるが、その図に久高は有見、津堅は通見の古訓の原型を伝えている。

また『おもしろさうし』(1623年)の数巻の地名に、久高島(こばしま)、津堅(連れ島)、浜、平安座、伊計島が知られて居り、『琉球国高覧帳』⁸⁾(1635年～)には、久高島、津堅島、浜島、平安座島、宮城島、伊計島の島々は地割替の村としてその石高が記載されている。

徐葆光著『中山伝信録』⁹⁾(1721年)の琉球36島のうち東4島を久高(姑達佳),津堅(津奇奴),浜(巴麻),伊計(伊計)として内外に紹介されている。

このように中城湾の外洋側に位置する島々が古文獻,古地図に明記されているのに,それに比べて内湾側のサンゴ礁海域に発達した「あせ嶋」「あふ嶋」が無人島として,18世紀の中葉まで開拓移住から取り残されていたということは,むしろ泡瀬にとって,もっけの幸いであった。

Ⅲ 泡瀬の地名考

(1)古老の伝承として「^{はんせい}樊姓由来記」¹⁰⁾には,次のように述べられている。

泡瀬(アーシ)とは,1つの小島なるが故に大地(ウフジー)との間の海の潮が「南と北」即ち中城渡口の下の海から流れて来た潮と,勝連半島から上江洲下の海を流れて来た潮が高原の下で行き当って其の砂が堆積して出来た海中の砂丘だから「アーチ島小(シマグラー)といったことが遂に「アーシ島小」に転訛してきたので之に「泡瀬」の漢字を当てて今日の名称になったのであると説いている。

(以上原文のまま)

この伝承によると,「アーチ島」が「アーシ島」に変化したとする俗説があるが,そのことより2つの潮流の合流点に砂が堆積して島が形成されたとする説明は理解できる。

(2)「美里村史」¹¹⁾の著者は,同書の22頁に,美里校長時代(1910年頃)に見た美里間切図(白蟻の為喪失)に泡瀬の地名表記について「あわせ小離」と書かれ無人島として描かれてあったのを記憶しているとされ,また同書の202頁には,「あわす小離」と書かれ無人島とされていた。そして「あわすは泡瀬で現今潮を瀬と書いているのは誤記してその儘になっているのであろう」との見解を述べて居られる。

同一の書の中で,「あわせ小離」(22頁),「あわす小離」(202頁)とあることは,地名表記を考察する上から甚だ困るけれども,著者の意図が「泡潮(あわす)」を「泡瀬(あわせ)」と誤記してその儘になったとする見解をとって居られるので,そのことについて検討してみたい。

「潮」うしお,海水,という日本語は,方言では,「うしゅ,しゅう」→「うす,すう」と変化する。

琉歌の^{へしきぶし}平敷節(一名源河節)の

源河走川や ^{はい}潮か湯か水か

源河みやらびたが おすでどころ

(歌意)

源河の急流は,潮であろうか,湯であろうか,はたまた水であろうか。源河村の娘達が嬉嬉として水浴びをする所である。

この歌詞にみられる「潮」(うす)である。

「泡潮」は,「あわす」→「あわす」と変化するごとが考えられるから,本来の泡瀬の漢字表記は「泡潮」であったろうとしたものであろう。

それでは何故,泡瀬でなく泡潮なのかという疑問が湧いてくるが,その点について考えてみると,泡瀬の異名に「アーシマス」という呼称がある。これは泡瀬が県下に誇る塩の名産地であったことからの異称であるが,この「塩」と「潮」が方言では同音の部分があることから泡潮が本来の漢字表記と考えたのかも知れない。

『混効験集』¹²⁾によると,塩は「おましほ」で,「お」は接頭敬語,「ましほ」は塩の意。方言では「まーしゅ」「まーす」で,単に「すー」ともいう。例えば「すー煮」とか「すーつけ肉」の用例がある。

このように「塩」と「潮」は「すう,すー」と同音のこともあるので「あわす小離」を「泡潮」小離と表記することが本来の地名表記であったとしたのであろう。

(3) それでは現今の「泡瀬」という文字は、どのように考えたらいだろうか。その充当漢字は宛字ではあるが、その出典は『球陽』¹³⁾の巻20尚瀨王2(1805)年の記事が初見で、今(1985年)から180年前である。

泡瀬(あわせ)は^{きす}砂州島であったが(この点については泡瀬誌の第二節泡瀬の自然を参照)、明治20(1887)年頃から人工的に半島状に陸続きとなったものである。この砂州島の成因から考えれば、「あわす小離」の「あわす」を「泡州」ではないかとする考え方もあるが、「す」より「せ」の方が古くから使用されていることに注目せねばならない。すなわち「元禄図」¹⁴⁾(1702年)に表記された「あせ嶋」がそれである。このあせ嶋については後述するとして、先ず「泡瀬」(あわせ)と「泡州」(あわす)を検討することにしよう。

泡瀬(あわせ)は、泡と瀬の2音節から構成され、方言では泡は(ああ、あー)と長音化し、瀬は(し)と発音する。したがって泡瀬(あわせ)は(ああし、あーし)と呼称されている。

泡(ああ)は、安和(ああ)、泡(ああぶく)などの(ああ)と同じで、瀬(せ)と州(す)は、いずれも(し)と発音される。例えば、

瀬嵩(しだき)、瀬長(しなが)、瀬底(しすく)、備瀬(びいし)、喜瀬(ちし)、干瀬(ひし)などがある。また州は、高江州(たけーし)、江洲(いし)、上江州(いじ)の用例がある。

このように「瀬」と「州」の混同がみられるが、「泡州」という漢字表記は文献・資料上に検索することができないので、「泡瀬」の充当文字を地名表記の原点と考えてよいと思う。

(4) 先述の元禄図(1702年)に初見の「あせ嶋」の「あせ」と『おもろさうし』第一(1531年)に見られる「あせ」という語とが何等かの関係がないものだろうか、…

年代的に大きなずれがあるので、大きな期待はで

きないが、言語学者¹⁵⁾による「おもろ」における「あせ」の語意についての研究の一端を披露することにする。

やへましまいつこ (八重山島殿子)
あよまよいしめや (肝迷いしめや)
又はたらしまくはら (波照間島くはら)
きもまよいとらちへ (肝迷い取らちへ)
又首里もりあせは (首里杜あせは)
つちぎりにきらせ (土斬りに斬らせ)
又ま玉もりちかわは (真玉杜ちかわは)
みちやぎりにきらせ (土斬りに斬らせ)

とあり(傍点は筆者による)、イツコ(殿子)、クハラ、アセ、チカワが島々の指導者、軍勢の部将をさしているとされ、さらに「アセ」の複数形やその変化、とくに「セ」の語意の時代的背景などについて詳述しておられる。

『広辞苑』、『広辞林』はいずれも、「ア(吾)セ(兄)」は男子を親しんで呼ぶ語とある。『おもろさうし』日本思想大系18の補注に、「アセ」は男、兵士、または長老の意。戦時には将領となった。「あす」、「大ころ」(男性の美称)と同じ階層である。首里おもろに限り出ているから「あす」と同義であろう。この『おもろさうし』の「あせ」と「元禄図」の「あせ嶋」の「あせ」が同義語だとすると、「あせ嶋」はさしずめ「部将の島」或は「世の主の島」ともなりそうな気がして、それも筆者の素朴な願望^{しんせん}の域を出るものではないが、興味津津たるものがある。

ともあれ泡瀬の地名は、「あせ嶋」→「あわす小離」と変化し、『球陽』で「泡瀬」という漢字表記に定着し、明治10(1877)年の『沖繩志』にみられた「阿瀬」の異字表記以外は、泡瀬という表記を現在まで継承してきているわけであるが、その語源の定説はないようだ。

沖縄の人名は、本来、沖縄の地名から出ているものであるから、「那覇姓」や「首里姓」まで戸籍上みられるが、「泡瀬姓」は全く見聞したことがない。

それはこれまで考古学的調査が行われたことがないことや、遺跡の有無の究明など、今後に期待すべきことが多い。

これらのことは泡瀬の開拓の歴史の新鮮さを立証するものと考えてよいであろう。

文献及び注

- 1) 外間守善・西郷信綱(1972):『おもろさうし』
- 2) 球陽研究会(1974):『球陽』
- 3) 講談社(1974):『守礼之邦沖縄 上巻』
- 4) 奥武島の地名については、仲松弥秀, 外間守善, 小玉正任その他の研究がある。
- 5) 小葉田淳他(1969):『南島』三輯「おもろさうし研究」
- 6) 池宮正治(1984):『沖縄市史』第二巻「沖縄史関係のおもろ」
- 7) 中山盛茂(1969):『琉球史辞典』
- 8) 内務省蔵本 『琉球国高究帳』 明治38年写
- 9) 徐葆光(1721):『中山伝信録』
- 10) 高江洲門中(1969):『樊姓由来記』. 泡瀬の最大門中の高江洲門中共栄会の高江洲義総, 義永, 義豊氏らの尽力により, 林清国氏に依頼して作成され, 昭和44(1969)年に刊行された冊子である。
- 11) 平田嗣一(1962):『美里村史』
- 12) 外間守善(1970):『混効験集一校本と研究』
- 13) 前掲2)
- 14) 前掲3)
- 15) 中本正智(1985):『日本語の系譜』